

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

文学部・日本語・日本文学科
鎌田 学

作成日 2023年5月25日

1. 教育の責務

2000年度に弘前学院大学文学部に採用され、現在に至る。一般教育科目に属する「哲学」をメインに、「美学」や「論理学」領域についても担当。後者2領域は1年次必修の「基礎演習」で主に展開している。また、「常識日本語」や「小論文演習」で実用日本語、アカデミック・ライティングを、「教養演習」ではヨーロッパの古典語および近代語について教授している。加えて、「日本文化研究」「日本のサブカルチャー」において文化多元論の立場から日本文化の特異性と普遍性について論じている。英語・英米文学科の専門科目である「Cultural Studies E」では、現代欧米社会の思想動向を顕著に表す著作を取り上げ、異文化の理解深化に努めている。なお、授業形態としては講義と演習両方を担当。

教育活動として、「大学FD委員会」に属しFD活動の企画・運営を行っている(2021-22年度)。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
哲学と倫理A	1～4年	講義	前期	西洋倫理、応用倫理、政治哲学
哲学と倫理B	1～4年	講義	後期	西洋思想、文化理論、比較文化
基礎演習Ⅰ×2	1年	演習	前期	論理学、日本語能力、演算能力
基礎演習Ⅱ×2	1年	演習	後期	論理学、社会問題、演算能力
教養演習C	2～4年	演習	前期	フランス語、会話能力、異文化理解
教養演習D	2～4年	演習	後期	ラテン語、西洋史、異文化理解
教養演習H	2～4年	演習	後期	ドイツ語、会話能力、異文化理解
小論文演習	2～4年	演習	後期	アカデミック・ライティング、実用文章
Cultural Studies E	2～4年	講義	前期	現代アメリカ社会、ディズニー映画
日本文化研究A	3～4年	講義	前期	近代化、日本史、比較文化論
日本のサブカルチャー	2～4年	講義	後期	戦後日本、消費文化、クール・ジャパン
常識日本語A	2～4年	講義	前期	漢字検定準1級、日本語検定1級、ニュース検定、秘書検定

2. 教育の理念

私の教育理念は、「情報氾濫」の時代にあって自分で「思考する」ことへ学生を導き覚醒させることである。そのためのモデルになるのは、「哲学」や「美学」の古典テキスト群である。また、「思考の道具」としての「論理学」は、「正しく」思考するために学生が必ず身に付けなければならない基礎知識である。このことは直ちに、「言語」の省察へと学生を導かずにはおかない。日本語の理解を深めることは、諸外国語との比較考量をも求める。また、日本文化について学ぶことは、異文化・多文化理解の感度を高め、今日の「グローバルな社会」の中の「実践知」につながる。

「哲学と倫理A,B」において古典テキスト群として想定するのは、プラトンからロールズまでの著作物である。原書で読むのが困難なときには、邦訳を用いて学生に理解を促す。「基礎演習」では、記号論理学を扱い、その上で「推論問題」を自力で解けるように指導している。「常識日本語A」は職業人として必要とされる実用日本語の運用能力を高める。「教養演習」はヨーロッパの共通語であったラテン語、ドイツ語およびフランス語（両者の到達目標は中級レベル）を学生が自主的に学びを継続できるよう、「歴史」と「社会」の両側面を解説しつつ指導する。

私の教育理念を端的に言えば、学生が①正しく言葉を理解、解釈して思考を展開できるようになること、②狭隘な視野に囚われることなく世界のありさまをグローバルに幅広く、かつ深く歴史的に捉えられるようになること、この二つである。

3. 教育の方法

テキスト解釈の作業を重視し、言葉の一つ一つ丁寧に拾い集める(lesen、独語)方法を実践する。「哲学と倫理A,B」授業冒頭で、前回内容の簡単なまとめをした後で、当日分のポイント(論点)を説明。原書あるいは翻訳を毎回資料として配布しコメントカード(私の用語ではPhilo-Atelier)を作成してもらおう。しかも、単に指定字数で書くだけでなく、授業時間内に数名に口頭で発表も行わせている。翌週必ず返却し、面白い指摘があった場合それを聴講者の前で紹介することもある。

また「論理学」「言語」領域の授業においては、「規則(演繹あるいは文法の)」を徹底的に理解しないと何も身に付かないゆえ、学生に数多くの類似問題を解かせたり、反復練習をさせ定着をはかっている。毎週課題のチェックを授業冒頭で行ったり、隔週で小テスト、期末に定期試験を実施している。

とくに「言語」系の授業は、文字情報だけだと理解が進まない場合がある。そのため、動画(映画)を利用して自然な音声に慣れたり、身体動作を伴う「数字覚えゲーム」等を取り入れたり工夫している。

学修成果が明らかな学生にはシラバス記載のレベルより難しい練習問題を与えたり、逆に理解の遅い学生にはより容易なそれを課している(個別指導の実践)。

すべての担当科目に共通するのは、ディスカッションの時間を設け、PBLを中心に学生主体の授業を展開していることである。また、履修者の多い講義形式の授業では、パワーポイントを使用し、必要があれば参考資料をクラスのTeamsにupし、学生にとっての利便性を高めている。

4. 教育の成果

私の授業評価アンケートによれば、難解なテキスト解釈を実施する授業であっても、全学平均値よりも「満足」項目が高い結果となっている。これは、初回ガイダンス時に、授業の狙い、予習復習の仕方等を詳しく説明した結果であろうと思われる。加えて、授業担当者が的確な解説を適宜行ったことに由来するかもしれない。

「論理学」「言語」系の授業に関しては、学修成果の良し悪しはペーパー試験で明らかになる。「できる、できない」は個人差があるが、途中あきらめない限りシラバスで表明したレベルに大抵の学生は達している。

「常識日本語」や「教養演習」の授業をきっかけに、例えば「漢字検定準一級」「ドイツ語検定3級」を受験、合格する者も中にはいる。それゆえ、彼らにとっては資格取得の役に立ったといえる。また、公務員試験や教員採用試験対策として私の「基礎演習」を履修する学生が少なくない。自力だけで始めるのは忍耐が必要だが、この授業で困難なくこれらの試験のおおよその内容を知ることができる点において、彼らには有益な授業となっている。

5. 教育の改善

私の授業評価アンケートによれば、担当全科目の「内容に対する評価」で全学平均値より低いものは皆無である。その点、早急に「大改革」が必要とは考えない。しかし、「学生自身の自己評価」で低い値の項目が散見される。改善すべきは、現状よりも学生のやる気を高めて、学生個々への対応（個別指導）をより精緻に行い、高い理解レベルへ彼らの多くを押し上げていくことである。

6. 教育の目標

2023年度に限って言えば、基本的にこれまでのやり方を継続しつつ、学生個々の指導をより強化することである。長期的には、各領域の学修達成目標を今よりも徐々に上方修正(例えば、「哲学と倫理A,B」で欧米原書のテキスト解釈を通常化したり、「教養演習」で外国語検定試験準2級を到達目標に設定すること)し、よりレベルの高い学生を育てることである。

【資料】

1. シラバス
2. 配布資料
3. パワーポイント・データ
4. 授業評価アンケート
5. 学生提出の各課題（レポート、Philo-Atelier）
6. 定期試験、小試験の結果